

「伊藤若冲の作品を通して京の文化を知る」

若冲 シンポジウム

平成25年11月10日 日

場所・京都芸術劇場 春秋座

(京都造形芸術大学内)



■開催概要

- 15時より
- ・受付開始
- ・『高精細複製画による若冲展』
- 16時より
- ・シンポジウム開演 (18時終了予定)

■パネラー

- ・辻 惟雄 (MIHO MUSEUM 館長)
- ・狩野 博幸 (同志社大学 教授)
- ・奥平 俊六 (大阪大学 教授)
- ・椿 昇 (京都造形芸術大学 教授)
- ・細見 良行 (細見美術館館長)

司会：岡野 智子 (細見美術館 上席研究員)

※敬称略



伊藤若冲



入場無料
事前予約制

群鶏図 伊藤若冲筆
江戸中期 細見美術館蔵

●辻惟雄先生

1932 年名古屋生まれ、若冲研究のさきがけ

東京大学名誉教授、多摩美術大学名誉教授、Miho Museum館長

著書『奇想の系譜』（1988年、ペリかん社）など多数

「若冲と生き物たち」

秋篠宮様主催の「生き物文化誌学会」で行った若冲『動植彩絵』講演を下敷きとし今日の講演をさせていただきます。

伊藤若冲（1716-1800）に京都錦小路に4代目栴屋源左衛門として生を受ける。大典顕常

（1719-1801）の銘文若冲51歳の寿塔（相国寺）

絵画学習の過程（狩野派～宋元画～モノに即して描く（写生）～動植物～鶏）

若冲は、狩野派の勉強からはじめて中国画の勉強もしていました。中国の画家はモノに即してこだわって描くという特徴があるため、若冲は写生の手法を身に付けようと、庭に飼っていた鶏をモデルに練習を重ねました。そのため、鶏の羽毛や姿形の美しさを描いた作品が多く残っています。

「竹に鶏図」羅窓、南宋

この作品は、純白の鶏で輪郭をぼかすことでモチーフを浮き立たせる技法を使っています。鶏の立体感、羽の毛の柔らかさまですべて描きあらわされています。写生のお手本というべき中国画らしい作品です。

中国花鳥画の伝統も時代と共に変わっていき、西洋画風が入ってくると色彩が多彩になり、動物の生態も分かりやすく親しみやすく描かれるようになります。一方で、写生の手法はますます細かくなります。若冲の活躍した時代、中国の画家・新南蘋（しんなんぴん）が長崎を通じて日本に来航し南蘋派と呼ばれ大流行します。当時の代表的な南蘋派の画家には熊斐（ゆうひ）、鶴亭、宋紫石、紫山、諸葛監などがいます。

「糸瓜群虫図」若冲（細見美術館所蔵）

若冲は40代の10年間をかけて「動植彩絵」を描いていますが、その前段階の修作として「糸瓜群虫図」などの作品を描いています。糸瓜が美しく実りたくさんの虫が描かれています。陰影がほどこされ西洋画の影響が見て取れます。この作品の良さを理解しコレクションされた泉大津市の実業家・細見亮市さんの見識の高さを評価したいと思います。

「牡丹に白鶏図・部分」宋紫石

鶏はこういうものだという典型的な鶏画です。宋の画家の描いた鶏ほどの品格はありませんが親しみやすさがあります。ところが若冲の鶏は少し違ってきます。

「群鶏図・動植彩絵のうち」若冲

とさかの中に黒い点がたくさん描きこまれています。とさか一つとってもこのような執拗な丁寧さがあります。それでいながら全体をとらえる力があります。鶏の目は黄土で描かれていますが、若冲の目にはこのように見えていたのでしょうか。写生といっても見たままに描くのではなく、見えるままに描くという主観性を表現していたことが分かります。鶏のポーズもユニークで鶏が足の付け根に頭を向けて足元の虫を取っています。鶏を観察してよくその姿態をとらえた結果、ただの写生を超えたシュールな迫力を持った作品に仕上がっています。宋の鶏の絵と比べ若冲画は、鶏の羽にしても美しいアラベスク模様を描いています。

「百鳥図」宋紫山

これは宋紫石の息子・宋紫山の作品で、様々な種類の鳥を描き分けています。描き方は若冲の手法に近いですが、よく観ると相当違います。若冲の描く鶏は空想力が付加されており、若冲の目に映るものは普通の人とは違っていたのではないかと思います。そのような独自の視線が代表作「動植彩絵」には結実されたように思います。若冲研究の中で、描かれた鶏の色を調べた研究者がいます。あかざさ、きざさ、しろ、くろ、こいいし、さざなみという6つの色を羽の中から拾い出すことができるそうです。実際の鶏を見て描いたにせよ、そのまま描いたわけではないことが分かります。このようなアラベスク模様のような描き方をされると、どこがどの鶏のどの部分かが渾然一体となり分からなくなりますが、全体として美しい色と形を配したデザインになっています。

ひまわりの絵

陰影をなくしてしまい色を塗った面の組み合わせのようになっています。このようにすると、通常は平面的になり遠近の区別がなくなるものですが、この絵に関しては、鶏のとさかの鮮やかな朱色と、尾羽の白黒の鮮やかな対照により鶏の姿が全面に出てきています。背景の朝顔やひまわりは意識的に色が抑え気味になっています。このような色の微妙な使い分けにより空間性が出てきています。

虫への愛着 池辺群虫図

「池辺群虫図（動植彩絵のうち）」若冲

若冲の作品を見ると虫への愛着が伝わってきます。しまいには生き物ばかりか石灯籠に

まで愛着を注いでいます。「池辺群虫図」では、池のほとりに暮らす様々な昆虫が描かれています。高精細画像で部分を拡大してみると一つ一つの部分に、非常に丹念に色を施しています。糸瓜に描かれた虫に食われた跡は、お化けの顔のように見えユーモアが感じられます。水墨画ではいっそう、そのような傾向が色濃くなってきます。

水墨画 童心とユーモア

「象と鯨図屏風」若冲（MIHO MUSEUM）

右側の屏風からは象が呼びかけ、左側の屏風では海から鯨が浮き上がり塩を吹いています。

梅原猛先生は「陸の王者の象と海の王者の鯨がエールを交換している」と表現しています。子供っぽいけれど非常にスケールの大きい、ユーモラスな絵です。若冲80代の頃の作品です。

若冲の水墨画と韓国絵画

「竹林図襖」（元金閣寺正院襖絵）

8枚で一つの作品になった屏風です。私が35年前に韓国のとある町で泊まった旅館に置いてあった屏風です。この竹の描き方が非常に気になりました。実は、若冲の作品にも独特の竹の描き方をしたものがあります。誇張を交え生き生きとした植物としての生態をとらえています。

2013年11月10日(日)

「若冲シンポジウム-伊藤若冲の作品を通して京の文化を知る-」講演録

狩野博幸先生

1947年福岡県生まれ 同志社大学文化情報学部教授

専門：桃山江戸絵画

18世紀江戸中期の京都画壇を取上げ

2000年若冲没後200年展を京都国立博物館で企画担当、若冲ブームの火付け役となった

若冲研究においては秋山輝夫先生、辻井伸夫先生の業績がありその先行研究の延長上に私の研究はあります。2000年に京都国立博物館で若冲展を開催したときには若い人を中心に若冲ブームが起き、展示を企画担当した一学芸員としては学芸員冥利につきる出来事でした。

最新の若冲研究については、まず大阪大学の美術史家・奥平俊六先生の業績をご紹介しなければなりません。

奥平先生の提言があるまでは、若冲研究はもっぱら相国寺の大典顕常和尚(1719-1801)の記した若冲の伝記を文献として参照していました。この伝記に記されていた若冲像は仕事に身が入らず、絵ばかりが楽しみの人物として描かれています。私をはじめ多くの研究者は、この文献を引用して「(若冲は)オタクのような(人物であった)」などと言っていました。しかし、奥平先生が『新修茨木市史 第9巻 史料編 美術工芸』(2008年)の中で滋賀大学の経済史専門・宇佐美英機先生が調べられた青物問屋記録を紹介されたことを機に若冲像が大きく変わります。その内容とは以下のようなものでした。「明和8年(1771)京都東町奉行所の意向で錦小路高倉市場が中止させられることになった。しかし、これに対し、当時50代半ばの若冲が交渉にあたり足掛け4年の歳月をかけて中止を回避した」。この記録から、それまでの若冲観についてあらゆることがひっくり返ってきました。

若冲56歳頃、町年寄りとして理不尽な奉行所の動きに対しそれを阻止したという事実を前に、若冲の人格を「オタクのようだ」と評していたことが、いかに的外れであったかが分かってきました。そのような経緯から近年、新しい若冲像が出てきました。私は現在も若冲に関する講演をよく頼まれますが、これらの講演を、自戒を込めて「お詫び行脚」と呼び講演の冒頭でいつも「お詫び申し上げます」とこの経緯を説明しています。

このような若冲の人物像が分かってくると同じ絵が違って見えてくるものです。

私は伏見桃山御陵のあたりに住んでいますが、近所にある御香宮神社で毎年5月に伏見義民祭が行われています。今まで気にもとめていませんでしたが、実はこの義民祭と若冲には関係があったのです。若冲70代のとき、伏見奉行・小堀政方と与力や岡っ引きなどが伏見の町人たちの金銭を収奪するという事件が起きました。この理不尽に対し伏見の町人たちは7人の代表を出して天明5年(1785)に江戸幕府に対し膨大な訴状を持って訴え出ます。この訴えは認められ町人側は勝訴し、小堀政方の領地は没収され部下たちは死罪もしくは追放されます。しかし、訴訟吟味がなされる間に、7人の町人たちは獄死、客死して1人も京都に戻りませんでし

た。彼らを「天明義民」と呼び鎮魂する祭りが伏見義民祭です。訴状には「なんのおかまいこれなきよし」とあり、「あなたたちになんの罪もない」と書かれていますが、その代償は命を投げ出すという結果になりました。

伏見7人衆のメンバーで首謀者の刃物鍛冶・文珠九助は、伏見の町年寄を勤めた人で、若冲と同じ役目を務めた人です。若冲も錦市場の騒動を治める足掛け4年の間に江戸表へ訴え出ることも考えますが、仮にこれを実行した場合は、自分が二度と京の地を踏めないと覚悟の上で検討しています。このような時代背景をかながみると、同じ「伏見人形布袋図」でも時期によって作風が違っていることに気付きます。細見美術館蔵、エツコ・ジョウ プライスコレクションなど様々な「伏見人形布袋図」がある中でも初期の作品では人形そのものの素朴さを描いています。晩年の作品になると布袋さんが7人描かれるようになり「7人の布袋」が大きなモチーフとなります。（「伏見人形図」国立歴史民俗博物館蔵）

私は2000年の若冲展では「『伏見人形図』の解説に、濃密な「動植彩絵」のような作品ではなく、素朴な作品もある」と記していますが、それだけでは説明しきれないものがあるのではないかと気付かされました。若冲は70代になる前頃から石峰寺に通うようになりますが、当時彼は伏見奉行所の事件に大きな関心を持っていたであろうと推測できます。なぜなら彼自身が錦市場をめぐる奉行所との闘いの中で伏見の町人衆と同じような経験をしたからです。「7人の布袋」には、「素朴な絵」ではすまない、町のために犠牲になった7人を悼む「思い」があります。そして伏見の人はこの絵を見るたびに犠牲になった7人の姿を想起したはずです。

奥平俊六先生

1953年愛媛県出身

大阪大学文学部教授

専門：桃山から江戸の風俗画を中心に近世絵画

●「豊中市史」と「茨城市史」で触れた若冲

金地の襖に描かれた「仙人掌（サボテン）群鶏図襖」は西福寺の所蔵で、摂津の国・小曾根村（現在の大阪府豊中市）にあります。摂津の国は現代では北摂と呼ばれる池田・伊丹・西宮から神戸市の一部まで入る広域な地域です。その昔は上方文化の中心地の一つで「京摂」と京都と摂津を並べる言い方もありました。天明8年（1788）江戸時代最大の火災・天明の大火で京の町がほとんど焼けてしまったとき、若冲は伏見経由でしばらく大阪に避難しています。このとき西福寺にも関わりを持ったのでしょうか。

西福寺の六面の襖に鶏と仙人掌が描かれています。若冲が総金箔の襖に描いた作品はこれ以外にはありません。京都の海宝寺所蔵の襖絵と金閣寺正院襖絵も水墨画です。讃岐の金比羅山の襖は金砂粉が少しまいてあります。金屏風に描いたものは、ここにしかない。それはなぜなのかについて「豊中市史」などで紹介しています。若冲は裕福な家庭に生まれ金銭的に困ることはなかったでしょうが、天明の大火で被災し店も家もすべて消失した後は金策に苦労したこともあり、このような高価な大作を描いたのではないか、という説を唱える人も居ます。

私は少し別の見方をしています。

絵を良く見ると金箔で押されて形が凝縮されているように見えます。右側三面は、形が幾何学的に調整されているようにも見えます。近年修復された折、引き手を取り除くともっとあでやかな青と緑が出てきました。西福寺のある小曾根村は二つの天井川に挟まれた地域で農作物も豊かです。江戸後期には百戸くらいの村で、その一番北の端にあります。近世絵画研究者の土居次義先生の昭和40年代のノートには以下のような文書が残っています。

さすがに寺の門前には見るからに旧家らしい構えの屋敷が残っていてゆかしい古い時代の雰囲気だただよっております。（「若冲-西福寺を中心に-」）

小曾根村には、古い土蔵を残した旧家がいくつかあります。私は最近その中の1軒にお邪魔しました。すると、このような襖絵が残っていました。「若松」が母屋の居間の襖に描かれています。江戸の天宝年間に再興されたもので、再興の際に二代くらい前に家を建てたときに出た古材をたくさん用いています。襖絵もこのとき描かれていたものをそのまま描いたのではないかとされています。部分を見ると、若冲と合い通じるところがあるように思われます。一番右の端に「法眼江阿弥筆」とあり二つハンコがおしてあります。

●江阿弥

江阿弥（1700-1775）という画家は大阪を中心にいわゆる摂津の国で活躍した狩野派系の大坂画壇の画家です。大岡春朴（1680-1763）という画家の弟子です。若冲は最初、大岡春朴に絵

を習ったという資料がいくつかの画論に出てきます。大岡春朴はたくさんの絵手本つまり教材を出版しており、それが若冲到影響を与えたということは、何人かの研究者が詳しく指摘しています。若冲だけではなく、与謝蕪村（1716-1784）なども大岡春朴の絵手本の影響を大きく受けています。江阿弥については木村重圭先生が非常に詳しいモノグラフを1990年に書いておられます。

さて、金砂子は後蒔きです。水墨で4人の四皓が口バに乗って森に入っていくところです。

「商山四皓」だと思います。大徳寺の鎮守庵にある長谷川等伯の「商山四皓図」などの主題解釈に近いものがあります。この右端にも落款があります。「江阿弥享年71翁」とあります。江阿弥は生没年やお墓がわかっていません。しばらく現在の兵庫県高砂に住んでいたこともありますが多くは大阪市内の中心に住んでいて、大阪で出版された「平安人物史」という有面人目録には江阿弥は3番目くらいに出てきます。わりと有力な画家だったようです。江阿弥の今まで知られている絵の中で71という歳書きがあるのは初めてで今まで知られていませんでした。若冲没後30年くらいのときの資料の中に、「初めの名は春狂、おさなきより絵を好み大岡春朴に学ぶ」とあります。これについては、実際に絵を習ったかどうかは分かりませんが、もし習っていたとしたら江阿弥は若冲にとって兄弟子にあたります。江阿弥は大岡春信とも名乗っています。春を使ってハンコに春江と称していることもあります。若冲がこれらの画家に無関心であったはずはありません。

その絵が西福寺のすぐそばの庄屋さんの家にあり、大正年間に西福寺を調べて最初に公表された「いしだきこうよう」さんの当時の伝聞には半年くらいその近辺に滞在したとあります。被災し疎開していたのだらうと紹介されています。少なくとも西福寺で仕事をしたのなら、庄屋さんの家に行かなかつたわけではないだらうと考えます。

●春朴、江阿弥、若冲

春朴と同様、橘守国（1679-1748）という大阪画壇の狩野派系の画家が絵手本をたくさん描いていて、これも上方の画家たちに流派を問わず強い影響を与えています。春朴の絵手本は今、確かめられているところで若冲や蕪村に直接影響を与えています。勝部如春斎（1721-1784）は若冲より少し年下ですが、西宮伊丹池田豊中などいわゆる摂津の国に多くの金壁襖絵をたくさん描いて、それが今も残っています。このことも若冲の頭の中にあつたかもしれない。西福寺の襖絵は若冲にとっては摂津風、大阪画壇の狩野派風というのを意識したのかもしれない。部分を見るとずいぶん荒いですが相通じるところがあります。

鶴と若松は長寿、子孫繁栄を願う吉祥の主題ですが、鶏とサボテンも鶴と松を若冲風に変換させるならば鶏とサボテンになったのではないのでしょうか。若冲は天明の大火で被災した年の10月に大阪のもっとも影響力のある木村兼葭堂を尋ねています。彼もサボテンを持っていたのでしょう。サボテンは湯水に耐える生命力のようなものがあります。そこで松をサボテンに、鶴を鶏に変換したということではないか。

さらに、「豊中市史」で指摘したのが、左三面に描かれたひよこです。75歳の歳書き以降、若冲はひよこを描くようになります。「斗米庵・米斗翁享年75歳」一番かしこまった署名です。

●鎮魂と再生

75歳以降ということになります。天明大火は天明8年（1788）1月30日未明から2月はじめくらいまで京都の中心部を焼き尽くしました。若冲はその同じ年に2回大阪兼葎堂を尋ねています（「兼葎堂日記」）。若冲75歳、寛政2年（1790）、天明の大火で被災した2年後ですが、狩野先生が仮説を出しておられます。若冲の歳書きの中には86歳、88歳というものがあります。確かな若冲筆間違いのないという絵の中にあります。実際には若冲は85歳で亡なっていますから謎がいろいろあります。

狩野先生によると、若冲は還暦以降、改元ごとに1歳加えたのではないかと。他にも例があるからです。その考え方は西福寺を見る限り、それで合っているのだらうと思います。寛政2年若冲は大病を患ったことともあり、西福寺の襖絵の中にはさらに被災後の鎮魂と再生を願う思いが込められていたのではないかと。それはやはり天明8年の後半に描いて、天明9年はじめにお披露目したと考えるのがごく自然ではないでしょうか。小さいひよこもポーズを取っています。全部で7羽のひよこが居ます。中国の人物画に郭子儀という子孫繁栄を願う人物画があります。鶏のカクシギというのか、施主のゴオンのことも考えながら、このときからそれをはじめすることに意味があるのでしょうか。

この裏に描かれた絵は蓮池です。仏間の内陣側に面していますから蓮池を描くということは良くあることですが、このようなひょうひょうとした蓮池を描く。右側から始まりで蕾が今にも開こうとしているところから、ムコ毛がはじまっているものもあり、衰えている花々もあります。右からずっとまるで人の一生のような、そういう感覚を持って描かれたように思えます。天明8年の後半だからこそという気持ちがしています。

●京撰

摂津の国・大阪の話になりましたが、京都の画家は近在の場所へ行っているような新しい発想を得ます。江戸時代の文人画家・池大雅（1723-1776）は「箕面箕山瀑布図」を描きますし、江戸中期の絵師・呉春（1752-1811）は京都生まれ京都育ちですが池田に転居した10年間で呉春の絵画を花開かせるようになりつたりします。京都は決して孤立しているわけではなく、京撰ということで物事を考えてみてはどうでしょうか。

椿昇先生

1953年京都市生まれ

京都市立芸術大学美術専攻科卒業

京都芸術大学芸術学部美術工芸学科学科長

●奇想の系譜・若冲との出会い

僕は西洋画科の大学生のときに骨董に詳しい北野先生と出会いました。授業で同時に左右に並んだスライドを30秒だけ見て真贋を当てるということをしました。最初のころはほとんど偽モノにひっかりました。なぜか偽者の方が良く見え、たいがい僕たちが見ていいなと思うものは偽モノでした。そんなことから、しだいに東洋美術に興味が移っていきました。僕の学生時代は、ほぼ大学に行かず茶碗やの絵付けをしたり友禅染の下絵を描いたりしていました。学費が年間1万8千円の時代、着物一反5万円くらいもらえましたので優雅な生活をしていました。高校の教師になってから給料が下がったほどです。本願寺さんの壺を描いたり、骨董屋さんと組んでいけない仕事をしたりしていました。そのうち西洋画ではないのではないか、と思うようになりました。

学生時代には辻先生の「奇想の系譜」に出会い、江戸時代の画家の情報も入ってきました。視覚芸術をやっている僕が最初に若冲を見たときに魅かれたのは「鳥獣花木図屏風」で、コンピュータのピクセルのような作品です。そのあたりから「動植彩絵」など描写のすごいものにどんどんはまっていきました。しかし、だんだんとフロイトなど人間の精神が壊れて腐っていくような部分に興味が出てきます。ルネッサンスの時代は近代化の中で、石工と呼ばれていた人が彫刻家と呼ばれるようになります。僕の中にあるテーマとして、「ルネッサンスが本当に良かったのか」という疑問があります。

ミケランジェロの「ダビデ」などを見て上手いなと思っていたのが、だんだんロンダリーニの「ピエタ」など途中で制作を放棄したような作品に強烈に引かれるようになります。そして、どうも若冲の中にいろんなフォーム（型）があると気付きます。若冲が様々な型を試していることに影響されて「オレも奇想の系譜を辿るしかないな」と思い始め、「病気」「いびつ」「壊れている」などの方向へ擦り寄っていきます。一番好きな作品は点描で描かれた「石灯籠」です。へたくそで形もゆがんでいて、まるで灯籠の一つ一つがだめな人間のように見えます。しかし、この作品を見ていると奇妙な石灯籠が僕に何かつぶやいているように思えるのです。

●作品（1991）幅6メートル

91年サンディエゴのラフォアの現代美術館で個展を開催しました。行灯のような作品を展示しました。バケツの中にはマーマレードが入っていて、像の鼻のようなものがバケツの中身を混ぜながらグルグル回ります。来訪者に意味を聞かれて説明できず、僕はチ

ヤンスを逃していきました。89年デビューしてからしばらくするとだんだん抽象化していきます。この作品は石灯籠的なメンタリティが反映されています。

- 「主の頌栄」 (フェオファン・グレク、14世紀)

ルネッサンスが来る前のロシアアイコン・フェオファン・グレクの作品です。非常にイノセントで不思議な感じがします。若冲の石灯籠とつながるところがあります。作者は僧侶です。この作品には意志や主体性を持たなかった者の描くプリミティブな稚拙さの中にあるすがすがしさがあります。「これを現代美術の中に取り込みたい」という思いが僕の中にあり、今でも好きな作品です。

80年代初め、大学を卒業した頃に現代美術をやって、モノ派とかいろいろ試行錯誤しましたが何か物足りなくて、結局「奇想の系譜」の方へ走っていくことになりました。

- 西武百貨店での個展 (1982)

迷いの中で、アジア旅行で出かけたスリランカで強烈な印象を受けて紙粘土で作品を造りました。

これが僕のキャリアの始まりです。

- 作品 (1985)

85年に兵庫県西宮に引っ越したのですが、その地域は土葬でした。近所のおじいさんが亡くなると、学校を休んで墓堀を手伝わされました。京都の町中で育った身には虫だらけの墓堀はこたえました。そこで衝動的に造ったのがこの作品です。ここら辺で奇想の系譜に入っています。これを見たアメリカのキュレーターが僕を展覧会に招待してくれました。

- 展覧会「アゲインスト・ネーチャー」サンフランシスコ～全米巡回 (1989)

アメリカで「みなさんは、日本はわび・さびの社会だと思っておられるかもしれないが、そんなことはない。日本にもおかしな人はたくさん居る。江戸時代のメインポピュラーカルチャーのすごい力もあるので、一面的に見てくれるな。俺たちはアゲインスト・ネーチャーだ」というメッセージを伝えました。この作品はニューヨークタイムズの一面掲載されるなど話題になりました。これはまさに若冲的な小さな単位が爆発して増えていくという世界です。

- 「birds」 (1992)

僕は1992年には具体的なものも作り始めます。黄色いいぼいぼで成功したので、今度は青いものや緑のものをとちがちですが、僕は1回ずつ作品を変えてしまいます。この

作品は香港で造ったインコのためのおもちゃなのです。若冲が「鸚鵡図」を描いていますが、同様に僕もフィギュアなものを造り始めます。

- 作品（1993）

中高校の教師をしていましたので、一時はアーティストになれないとナーバスになったのですが、「そうだ、こいつらを使ってアートをすればいいんだ」と発想を変えてからは楽になりました。体育の教師とつるんで、プールの水を抜いて森村さんに写真を撮ってもらいました。この作品はベニスビエンナーレに持って行きました。東洋の鯉を使っています。欧米ではあまり理解されませんでした。

- 作品（1977）

僕の頭の中には石灯籠図のようによく分からないものがぶよぶよおりまして、それを作品にそのまま出していきます。人形の眼球がびっしりついた作品です。97年にこのシリーズをたくさん描いています。

- 「contact」

抽象的な作品です。自分でも良く分かりませんが、こういうのが頭の中から出てくるのです。

- 「アリーナ」

ガラスドームの前で大声を出したときの気持ちです。

- 「曲がり角で待っているやつ」

- 「鳥獣花木図」

像の顔のアップです。このように部分を見ると不思議な感じがします。

- 「イメージのルール」

僕は李朝民画が好きです。寅や兎の描写などは若冲の像さんに通じるものがあります。写生ではなく架空の心の中に浮かぶ動物の「存在とは何か」というものが素直に画法によって表されていくところが李朝民画のすごさだと思います。職業とかマーケットとかそういうことではない、イノセントな強烈な時代を超えていく力があるのではないか。そのルールが僕にはまだ分かりません。

- 「ほ乳類」（最新作）

高さ9メートルのアドバルーン作品です。新宿のグラウンドタワーです。この辺りは奇

想の系譜を脈々とばく進しているところです。ホモサピエンスは7万5千年前にインドネシアの火山の噴火でほぼ絶滅にまで減ったといわれています。それが現在では70億人も居て、原子力発電などを行い地球環境に大きな影響を与える存在になっています。これはいったい何なのだろう。僕はこの作品に「マーマリアン」とタイトルをつけて「俺たちって何かな」という問題提起をしています。若冲が役人の不正に抗議し町衆のために犠牲になった7人を悼んで7人の布袋さんを描いたように、アーティストというものはその作品に何かを込めているはずです。

- 「池袋」 (2013) 高さ20メートル

演劇祭・「フェスティバル東京」に合わせて造った作品で、クリスマスまで池袋で展示されています。ギリシャ神話をテーマにしています。イエリネクというノーベル賞作家のテキストを元に、アンティゴネとイフネウタイという二つのギリシャ悲劇に使われるエクステウスマキナをモチーフにした作品です。どれだけ大きな作品かぜひ現場でご覧頂きたいです。このように黄色いオブジェを造ったアーティストがどんどん奇想の系譜を辿り壊れていくというのは、江戸時代の血が入っているのかな、と思うことがあります。少しは若冲と対抗できるかなと思っています。

公益財団法人細見美術館理事、細見美術館館長

細見良行さん

1954年京都市生まれ

同志社大学商学部卒

泉大津を拠点に日本美術コレクションを築いた細見家の三代目、1998年京都・岡崎に美術館を開館

全国での展覧会を通じ日本美術、とりわけ若冲や琳派の美術の普及に尽力

岡崎で美術館を設立したのが15年前になります。その前は東京でギャラリーの仕事をしていました。今でこそ、琳派や若冲など江戸絵画の話ばかりしていますが、東京に居た頃は現代アートにも関心があり作家・椿さんの「アゲインスト・ネーチャー」の絵画をみて感動し椿さんの作品で企画展を開いたこともあります。

「細見美術館開館1周年のチラシ」(1999年)

開館当初はお金がないので1枚に二つの企画展の案内を掲載しています。今は1回の展覧会で一つのポスターを制作できますが、当時はまだそこまではできませんでした。しかもまだ伊藤若冲だけでは企画が打てませんでした。若冲ブームは1999年の時点ではまだ来ておらず、大分県から田能村竹田をお借りし企画タイトルは「若冲と竹田をめぐって」としています。この翌年2000年に狩野先生が国立博物館で若冲展をされ、一大ブームが巻き起こりました。国立博物館の展覧会を観られた方から「細見さんのところ若冲がたくさんありますね」と言われ「去年若冲展やったんですけどね...」と応えた記憶があります。それほど1999年の細見美術館での若冲展は注目を浴びませんでした。

それから5、6年後、高島屋から若冲展を依頼されました。この頃には狩野先生のおかげで若冲ブームが来ていました。「若冲だけでは並びきらない」と言うと「琳派も一緒に」ということになりました。私は「琳派と若冲」というタイトルをつけましたが、高島屋の担当者が「どうしても若冲を先に持ってきてくれ」と言います。若冲は1人の画家の名前ですが、琳派というのはたくさんの画家の潮流ですから、私は担当者に「やはり琳派と若冲ではないでしょうか？」と進言しましたが相手は「いえ、若冲を先に出してください」と頑なに譲らず、結局高島屋で「若冲と琳派展」が開催されました。

現在、北は北海道から南は鹿児島まで日本全国で「若冲と琳派」で細見美術館の所蔵品をカップリングした巡回展が行われています。私たちは「若林展」と呼んでいます。私が琳派と若冲と一緒に紹介し続けた影響で、若冲が琳派の作家だと思っておられる方がたくさんおられますが、実際は若冲と琳派はまったく別の画派です。

「雪中雄鶏図」「糸瓜群虫図」「瓢箪・牡丹図」「鼠婚礼図」

若冲は妻帯もせずお酒も飲まず歌舞音曲も大嫌いだったという伝記から、私も若冲は変なおじさんのイメージがありました。しかし、このほのぼのとした雰囲気のある「鼠婚礼図」を見るたびに、「若冲は実は工工人なんちゃうかな」と思っていました。最近の研究で分かってきた

若冲像では、錦市場を救っていたということですから、そういう人間性が絵にも表れています。

「伏見人形図」「遊鶏図押絵貼屏風」

本日、ホワイエに飾っている絵は印刷会社・日本写真印刷株式会社にあるフェーズワンという機械を使い1億5千万画素で撮影したレプリカです。7、8年前から実験的に撮影していたものを本日展示しています。ガラスケースに入れたら展覧会ができるのではないかと、というくらい精度の高いできばえです。今からご覧に入れるのは高彩度で撮影した画像です。

「雪中雄鶏図」

雪の部分です。どろっとした質感で描かれています。墨を載せて上に白い雪を描いています。鶏の尾っぽです。鶏の顔の部分は、細かいドットで表現され眼の周りにはブルーのラインが入っています。羽の部分です。足の部分は盛り上げになって黄色です。現代アート作家・椿先生の作品に似ています。

菊の花に雪が載っています。地面に生える草の一本づつに雪が載っています。

「糸瓜群虫図」

ナミマイマイ、モンシロ蝶、クツワムシも居ます。日本の絵は床の間に飾って鑑賞するため、約70センチ離れて見ることになります。今からお見せする画像は、そのような状況の中では肉眼でほとんど見えない画像です。

カタツムリのぬめりけを丹念に描いています。モンシロ蝶は節足、お尻まで描いています。足が必ず葉や枝に引っかかっています。これをモニター上で初めて見たときはスタッフ一堂声を上げました。

カマキリ、ツユ虫、ギンヤンマ...ここには11匹の虫が描かれています。シヨウリヨウバツタとカエルが居ます。草木のツルのところにバツタの足がちゃんと載っています。

葉っぱには陰影をつけて描いています。よく見ると隙間を開けて描いています。普通は緑のベタを描いて上に葉脈を乗せますが、若冲は葉脈の間に隙間を開けています。水彩画ですから描き直しがきかない中、若冲は下に薄墨をひくとき、将来上に濃い墨が載るであろう部分に空間を開けているのです。このような細かな描写まで高彩度カメラで撮影することにより観察できるようになりました。

[ディスカッション]

●進行・岡野先生

HPに頂いた質問を紹介いたします。

- 質問「現代にも通じる鮮・華・彩、若冲の造形はどのようにして生まれてきたのでしょうか。」

椿先生から造形に力を得たというお話がありました。辻先生のご著書「奇想の系譜」には、若冲について書かれた冒頭にも当時の現代アーティストの言葉が紹介されていますので、ご紹介いたします。

「鶏々の厳しく区切られた奇妙な凝結は、心の中を揺り動かすようなフォルムを形作って、不定形の仙人掌とかみ合い響き合って流れてゆく。若冲が仙人掌の虜になったのではなく形にならない形を持つ仙人掌に託し自由に自己内面に持つ解放されたフォルムを次々に重ね、無限に広がってゆく世界を形成しているようだ」

奥平先生の仙人掌と鶏の（ご指摘？に寄せられて）いるようですが...

まず椿先生に現代に通じる若冲の魅力についてもう少しお話をお願いいたします。

●椿先生

若冲の専門家の方がたくさんおられるので、僕は作品を作る立場としてのお話になります。若冲に関わらず本当にオリジナリティや独創性がはたして明治以降あるのか、僕の中で学生時代から疑問でした。勉強すればするほど、どうも違うのではないかと。我々の民族的な仕事ではないのではないかと。

僕は完全に反抗的な学生でしたから、「先生の仕事は違うよ」というようなことを平気で言っていました。じゃあ自分がどうかというと、寄りすぎる場所は何なのか。私は京都芸術大学で学んでいましたので、近くにあった東山の智積院に昼寝に行っていました。入館料も高くなかったので庭でぼんやりしたり、長谷川等伯（1539～1610）に囲まれて幸せな空間でした。京都の町で勉強できたのはよかったと思います。

そのように考えると、18世紀以前にしか興味がいかない。それ以後、明治以降の仕事はどう逆立ちしても好きになれませんでした。だからこそ自分が作品を作るときはそこから直結したい。「若冲と私」とか、「芦雪」（長沢芦雪、1754～1799）「米僊」（久保田米僊、1852～1906）「蕭白」（曾我蕭白、1730～1781）などと自分を直結させたいという思いがありました。北斎の北斎漫画などもすごいですし、「大だるま」というパフォーマンスもやっています。これは現代のパフォーミングアーツの走りみたいなものです。

なんて自由なんだと思います。ですから、若冲から受けた一番の影響は、色や形ではなく、「こんなに好き勝手していいんだ」と私の背中を押してくれました。それが今の自分を支えていますし、日本人のルーツは見かけの日本絵画をなぞるのではなく、その根底にある自由闊達こそが現代美術を支えているのではないか。そこが私が強い恩恵を受けているところです。

- 進行・岡野先生

辻先生は、非常に早くから現代アートの意識や造形の力と若冲の関係に気づいておられたと思いますがいかがですか。

- 辻先生

細見館長に伺いたいのですが、「糸瓜に群虫図」を購入されたのは、おじいさまですか？それが一番すごいと思います。

- 細見館長

祖父です。詳しくはわかりませんが戦後すぐくらいでしょうか。

- 辻先生

このときが、若冲を発見した大一号ではないか。それ以外にもたくさん見せていただきました。ですから細見良さんはすごい画商だったと思います。

- 進行・岡野先生

若冲の非常に増殖していくような色や形、これが金地でより明確に見えているという奥平先生のご指摘、私はとても面白く伺いました。先ほど、これを拝見しながら、先生がご研究された「彦根屏風」男女の配置に似ているなという印象を持ったのですが、金地との関わりで、奥平先生いかがでしょうか。

- 辻先生

私は光琳を考えました。「動植綵絵」を描いている10年の間にだんだん光琳の影響が見られるようになってきます。たとえば「菊に流水図」では光琳風の流水が描いてありますし、そこで目覚めたのではないか。光琳の「杜若」は総金地です。色のコントラストなど、それをやろうとしたのではないか。狩野派もやっていましたね。狩野山楽が描いた獅子を描いた作品は総金地です。桃山時代の狩野派は総金地の作品を作っています。

- 奥平先生

天球院襖絵（妙心寺）も似ていると私は思っています。

- 加納先生

若冲の絵は、もちろん誰かの影響を受けているのですが、質問に「突然変異のように出現したのでしょうか」とありましたが、この辺りは少し注意しなければならないと思っています。近世絵画の研究ではすでにやられていたことですが、18世紀の京阪で「奇」という言葉が盛んに使われるようになります。「奇」であることを非常に重要視するような傾向があります。これは中国から来た思想ですが、「奇」であるというのは個性的であるということ、人と違っていいんだという考え方は京阪の哲学界で非常に強く言われるようになり、その影響の中で当然、光琳的なものや桃山時代からの狩野派も当然見ているでしょうし、そういう意味で突然変異と捉えてしまうと焦点がボケてしまうのではないのでしょうか。若冲だけの問題ではなく、曾我蕭白や長沢芦雪が、なぜ京都でしかも同時期に生まれてきたのか。若冲や蕭白、芦雪野流れは19世紀の京都では花開かないで、むしろ江戸の方に行った。北斎の名前が先ほど出ましたが、江戸につながっていった。そこから国芳や河鍋暁斎（1831～1889）につながる。19世紀になり、京都の「奇」という人と違っていいんだという考えが江戸に入っていったという見取り図を描いています。

私は、この絵が非常に変わっているということと同時に、はじめて奥平先生からご紹介いただいた西福寺の近くの家にある襖絵の写真を大変興味深く見えています。影響を受けるということの中に、あらゆるものを取り込んで行く中で、しかし、そこでは取捨選択している若冲が、18世紀後半の文学的哲学的な流れを体現した人だと思っています。

- 椿先生

今、「奇」ということを言ってもらって、思い当たることがあります。江戸時代の園芸植物が非常に隆盛になります。その中に唐橘という花があります。突然変異を起こしやすい品種です。これを掛け合わせ劣勢の遺伝子をうまく利用して多様な斑入りの葉を作っていく。劣勢、弱さを楽しみ合うという文化が生まれています。ですから、若冲が特異な人であったのではなく、若冲の周りや支える文化、江戸時代の文化事態が変わった形を愛で合うという文化があり、その延長に若冲が居たのではないか。私が危惧するのは、大学の教育現場に居るとその真逆です。人と同じにならないといじめられるという。江戸時代の闊達さの真逆にあるような現代社会のあり方が、我々にとっていいのか。若冲らを育てた時代が厳しく私たちに問いかけているのではないか。加納先生がご指摘された「奇」というものと真剣にとりくまなければならないと強く感じました。

- 進行・岡野先生

「奇」が楽しむ対象、自由の反映であるということでしょうか。

ご質問の一つに「錦の間屋の主人であった若冲がどのようにして絵画を学んだのでしょうか？」というものがありませんでした。大岡春卜なども若冲が学んだのではないかとされていますが、取捨選択をしていく若冲のセンスについていかがでしょうか。

- 奥平先生

富裕な商家の息子さんはたいていいろいろな習い事をします。その中に絵は普通にあります。習うのはたいてい最初は狩野派です。狩野派の役割は、絵を描くということの最初のやり方を広く提供しました。ここからいろいろな画家が若冲も含め離れていきますが、江戸時代の絵画史の中にはそういうことが背景にあります。

- 進行・岡野先生

若冲が絵画を習う初期の話がありましたので、逆に晩年期についてご質問を頂いています。「晩年期、特に石峰寺時代の若冲の特徴とはどんなことがありますか？」実は、今日は石峰寺のご住職もご来場いただいています。

- 辻先生

「菜蟲譜」（佐野市立吉澤記念美術館）は、それまでにないような色があり、若冲であることを疑うような作品です。私はこれこそ、まさに若冲だと思いました。それまでに「動植綵絵」を通じて鍛えられた若冲の野菜をはじめ植物や虫を見る眼は、さらに進み虫や野菜と一緒に遊んでいるというような境地になっています。「奇」とともに、「遊」ということを感じます。

「糸瓜群虫図」に描かれている蛙は、「池辺群虫図」と同じ形の蝦蟇が出てきて、それがもっと吹き出すような漫画チックな姿になっています。

遊びの要素が若冲の中にはあります。「動植綵絵」では、細かい点描を施し、ものすごい労力を費やしながらか同時にその絵の中で遊んでいます。糸瓜や貝をお化けの顔に見立てたりしています。

信行寺（東山区）の天井画の作品もそうですが、ディズニー作品のような草花が描かれています。私は今その頃の若冲と同じ年になりましたが、ああいう遊びの心境になりたいと思っています。

- 進行・岡野先生

遊びの要素が最晩年には見られるということですね。

では、最後に先生方から一言お願いいたします。

- 加納先生

奥平先生から、西福寺の様々なことをご指摘いただきました。私は2011年3月、NHKBSプレミアムで若冲の特集が放映されたときに出演しました。その収録は3月11日の1週間後でした。つまり東北地方太平洋地震の後で私も軽い鬱になっているような状態のときに、この番組を収録したのです。このとき、よく若冲の作品、特に「蓮池図」を見て、面白いなどと話していましたが、花のつぼみなどが非常に印象的に輝くように描かれています。それを見ながら、私は若冲が京都の滅びるような大火の後であの絵を描いているという背景を考えると、一種の再生、また生き返る京都を想起しているのではないかと思ひ至りました。

- 奥平先生

私は若冲について論文を書くのをずっと避けてきていましたが、それは、一ファンでいたいという思いが強いからです。壇上で若冲についてお話するのは、「茨木市史」のことでお話して以来、今日が2回目です。とはいえ、今日お話ししたことは、論文に書いておかなければと思います。若冲という人は本当にすごくまじめな人だと思います。まじめに奇に向かったり遊んだりする。それが本当に魅力的だなと思います。

- 椿先生

伏見の七人の商人が帰ってこなかったというエピソードを七人の布袋に描いたという加納先生のお話非常に心にしみました。アーティストはかくあるべしと心に刻みたいと思います。

- 細見館長

今日のこの5人、もしかすると私を除く4人かもしれませんが、奇の若冲のシンポジウムに登壇していただきましたが、奇が並んでいるのではないかな、というのが私の感想です。

文化庁の助成を受け、2014年3月15日に若冲作品の高精細レプリカでロンドンでシンポジウムを行います。

- 進行・岡野先生

2016年は、若冲生誕300年になります。これからますます若冲をもり立てていきたいと思ひます。

本日はありがとうございました。